

月のウサギと火星のタコ

三 春

40 年程前に書かれたエッセイを読んでいて「今もライカが宇宙を独り彷徨っていると思うと可哀そうで」という一文に驚いた。ライカとは 1957 年 11 月に人工衛星「スプートニク 2 号」に乗せられた世界初の宇宙犬ライカのことだ。当時の人々はライカがその後も地球の周りを飛び続けていると思っていたのだろうか。

ライカを乗せた目的は、人が宇宙へ飛び立つ将来を見据えて、生物にどのような影響が現れるかを調査することだったという。例えば、①閉鎖空間に閉じこめられても耐えられるか、②飛行中の機内の振動や騒音などの影響、③真空・無重力・放射線・厳しい温度変化・隕石など宇宙空間が生物に与える影響などである。それがどんなに残酷な実験だったかは言うまでもあるまい。ライカは激しいストレスと温度上昇によって、地球を出発して数時間で死亡したのだ。死に至る様子を想像するだけで当事者に対する怒りが湧いてくる。

人はなぜ宇宙を目指すのか。

2021 年 12 月、資産 2000 億円といわれる前澤友作氏がほんの 100 億円を割いて宇宙旅行を楽しんだ。国際宇宙ステーションに 12 日間滞在した彼は、大はしゃぎのメッセージをツイッターに投稿した。科学の進歩に役立つこともなく物見遊山と男のロマンとやらに消えた 100 億円だ。

そのツイッター買収の中心人物イーロン・マスク氏も宇宙開発事業に力を注いでいる一人である。電気自動車で知られるテスラ社の CEO でもある世界的な大富豪は、前澤氏と違って宇宙ビジネスに目をつけており、火星移住計画を本気で進めようとしている。

元宇宙飛行士の野口聡一氏は、火星より近い月に移住するほうが効率的かつ現実的だと言う。気候変動や食料危機など深刻な事態が迫る今こそ国民一丸となって移住計画を急がねばならないことを政府はもっと国民にアピールすべきだと、まるで脅しをかけるような言い方が気に食わない。

少なくとも私は地球を捨てて異星に住みたいとは思わない。もっとも、その前に私自身が自然消滅するけれど。